御忌の由来

法然上人は建暦2年（1212）1月25日、80歳で往生されました。「御忌」とは、この法然上人のご遺徳をしのぶ法要です。

「御忌」は本来、天皇陛下や皇后陛下のご命日の法要の尊称で、この語を使用するのは一般には許されないことでした。浄土宗が、この語を使えるようになったのは、大永4年（1524）、後柏原天皇が知恩院25世超誉存牛上人に「浄土宗を開かれた法然上人の恩徳を忘れないように、入滅された知恩院で7日間の御忌を勤めなさい」という『大永の御忌鳳詔』を出されたことがきっかけでした。以降、知恩院ではご命日の1月25日までの7日間、御忌を勤めてきましたが、明治10年から現在の4月に日程が変更されました。他の大本山や一般寺院でもこれに合わせて4月に行うところも多くなっています。

浄土宗の教えは、法然上人がその生涯を通して見出された、阿弥陀仏の本願により「南無阿弥陀仏」ととなえることによって老若男女関係なく極楽浄土に往生することができる、というものです。この教えにより民衆はどんなに救われたことでしょうか。なにしろ、それまでの仏教では、民衆は仏教と縁を結ぶことすら難しかったのですから。

「御忌」は、誰もが平等に救われるお念仏をお示しくださった法然上人の恩徳をしのぶ、とても大切な日なのです。

合掌について

（イラスト おうみかずひろ）　※イラストはイメージです。

合掌とは掌を合わせることです。もともとはインドやタイなどで行われている挨拶の作法にあたり、仏教ではこれを取り入れて、仏さまやご先祖さまを礼拝するときに行っています。

合掌には色々な手の合わせ方がありますが、浄土宗では「堅実心合掌」を用います。

手のひらをぴったりと合わせ、指先までしっかりと伸ばします。手首は45度ほどの角度に傾けて保ちます。胸からこぶしひとつ分ほどの間隔を開けると、自然に、かつ美しく見えます。

堅実、という字のとおり、まごころを込めてお念仏をおとなえいたしましょう。